

2011（平成23）年度 京都大学 入試問題 理系 第1問 解答例

問一

生涯一日に一個の帽子を作りつづけてきた帽子屋は、老いても国家に頼れず、視力も失ったが、今でも手で縫うという作業だけは確実に果たし続けることができるということ。

*京大では必出の、文学的表現の適切な置換能力を問う設問。ここでいきなり〈生きるという手仕事〉という筆者の人生観を問うていたのではない。「(手以外の) 他のすべては欺く」が「手だけが欺かない」という擬人化された表現を「わかりやすく」置換する。

問二

手だけを頼りに毎日帽子を作りつづける仕事を、自ら生きるべき一個の生き方とした者にふさわしく、帽子屋は、権力から自由に生き、無名のまま密かに死んだということ。

*「生きることをじぶんに引きうけた人間」「～に特有の」「自恃」「孤独」の4点を、「帽子屋のいとなみに即して」わかりやすく説明する。

問三

庶民は、各時世の政治体制における、それぞれの支配の論理によって組織され、正統化され、補完されることを受け入れることで自己の利益を図り、保身的に生きるということ。

*傍線部(3)は、「〈生きるという手仕事〉を果たすという生き方」によって「阻まれる」側であることに注意。また、「販いで」「生きのびてゆく」の置換を適切に行うこと。

問四（解答欄六行を五行に削減した解答モデル）

前者は、権力による支配の論理によって組織され、正統化され、補完される生を、自らの理想として追求する生き方である。これに対して、後者は、支配の思想を超え、現在の自己の生死のありようを正しく自覚して受容し、一個の自己として必然的で自律的な生を続ける自由な生き方である。

*「希望としての倫理によって生きる」は、問三の解答とほぼ一致する「支配の論理」に従う生き方である。「希望としての倫理」とは、理念を説くイデオロギーを指す。

*「事実を倫理として生きる」ことは「おまえはじぶんが生きなければならないように生きるがいい」の趣旨であり、また、最終段落直前の二段落の内容「自己の生と死の事実を正しく受け入れる」も解答に回収しておきたい。